

今回、東ティモールではコーヒー農家の子供にインタビューしました。7歳の男の子と女の子と5歳の男の子です。

まず、学校についてきいてみました。子供たちは全員学校に通っています。しかし、東ティモールには村によって様々な言語が存在していて、公用語で授業で使用されているテトゥン語はあまり話すことができないため、授業で何を話しているのかわからず、学校はあまり好きではないと言っていました。これは、東ティモールの学校の大きな課題だと思います。伝統を守るためにも、その村の言語はとても大切なものだと思います。しかし、それが教育のための足かせになってしまっていることも確かです。伝統を守りながら新しいことを教えて、人々の生活を豊かにしていくこと、また、どこまで僕たち外の人に関わっていいのかということは、とても難しいことだと思います。ほかにも、好きな食べ物をきくと、「お米」と答えていて、驚きました。食べられるものの種類の少なさからなのだと思います。

次に、家の手伝いは大変ですかと聞きました。子供たちは「大変ではない」と言っており、実際に手伝っているところを見ると、みんな笑顔で話しながら楽しそうに作業をしていました。事前に勉強した時は、児童労働の問題についてもっと深刻に考えていました。もっと暗くて、ジメジメしたところで、むりやり働かされているようなイメージがありました。しかし、そのイメージとは全く異なり、子供も大人も、明るく楽しそうに、笑顔で話しながら作業をしていました。

僕たちも実際に作業を一通りやらせていただきましたが、その作業は決して楽ではありませんでした。何十キロものコーヒー豆が入った袋をトラックの荷台に積み込んだりする肉体労働から、色や形の悪い欠点豆と呼ばれる豆をひたすら取り除く単純作業など、とても大変な作業でした。正直これを毎日やるのかと思うと、投げ出したいくなる気持ちもおこるだろうなと感じました。

しかし、村の人々と協力して、その作業をやり遂げた時の達成感は、忘れられません。大変な作業だからこそこの達成感が味わえるのだと感じました。現在の日本にはない、人々がなんのためらいもなく助け合う共同体がこの気持ちを生み出しているのだと思います。その共同体はとても明るくて、あたたかくて、とても居心地がよくて、1日だけでもその一員になれてとても幸せな体験ができました。

子供達も強制されて手伝っている印象は全くなくて、自分から進んで手伝っています。この明るい共同体の雰囲気や、仲間を大切にしている意識、「労働者」ではなく、世界一のコーヒーを作る「メンバーの一人」として誇りから突き動かされているのだと思います。

僕たちと同世代の一七歳で高校一年生のカリストくんと一六歳で中学二年生のジョニオくんにもお話を伺ってきました。二人はレテフォホのコーヒー農家の息子で七人兄弟。カリストくんは歩いて片道二時間以上かかるレテフォホの高校に通っていて、ジョニオくんはグレノの中学校に通っているそうです。

二人は学校が好きで、いつかは首都ディリで学校の先生になりたいと言っていました。勉強に関する意識はとても高く、今欲しいものを聞くと、英語の本や東ティモールの歴史の本、さらに学校と言っていました。学校は教室の数がたりず、午前と午後で分けて授業を行っているため、一日にできて三時間。学校までも遠くて、朝七時に家を出て、トラックの荷台に乗ってガタガタの山道を二時間以上進み、一〇時から授業開始。授業の時間より通学時間の方が長いです。もっと近くに学校が作れば、先生になりたい東ティモール人を雇うことができるし、もっと多くの授業をすることができるようになります。

また、トラックの荷台は東ティモールの山奥の人々にとっては、ほぼ唯一の交通手段です。人で溢れて、ぎゅうぎゅう詰めになったトラックを何度も見かけました。交通手段の整備も、必要です。直線距離にすると約30kmしかないのに道がガタガタで車でも二時間近くかかります。通勤通学だけではなく、コーヒー豆などの作物を輸送したりするのも簡単になります。

現在のフェアトレードの問題点

現在、フェアトレードの商品を、「どんな人たちが、どんな場所で、どんな方法で、どんな気持ちで作っているのか。」まで知って購入している人はほとんどいないと思います。大半の人はフェアトレードラベルや、フェアトレードという名前を見て、多少高くても「少しでもいいことができれば」や、「貧しい人を助けられるみたいだから」という認識だけで購入していると思います。しかし、それではフェアトレードはできていないと思います。フェアトレードが始まった当初の目的や理論、理想が現在のフェアトレードラベルなどの問題意識や、あり方と変わってきてしまっていると思います。

今回行った東ティモールでは、フェアトレードを行っている大企業が東ティモールの余裕のない生産者からコーヒーチェリー（果肉のついたままのコーヒー豆）を1kgあたり33セントという超低価格で買い叩いていました。この価格を、コーヒー豆の取引の基準となる生豆の状態に換算すると、1kgあたり約3ドルになります。この会社は、そのコーヒー豆を世界中にチェーン展開している有名なコーヒーショップとも取引しています。そのチェーン店では、東ティモールのコーヒー豆を「希少で高価な美味しいコーヒー」を売るという現在のコーヒーの流行に合わせて普通のコーヒーより高い価格で販売しています。その販売価格は250gで約2300円。つまり1kgあたり約9200円になります。生産者からは1kgあたり約3ドル、円に換算すると約300円で購入しているので、生産者の取り分は約0.3%となります。

事前学習で、コーヒー豆の価格がニューヨークの先物取引市場で投資家たちによって価格が決められていることを学びました。先物価格はブラジルの大農園を基準に決められており、小農家が多い東ティモールの人々にとっては不利な価格になります。そして、2016年8月24日で見ると、ニューヨークのコーヒー先物取引価格は1kgあたり3.15ドルであり、先述した大企業はほぼ先物価格で農家から買い取っていたこととなります。

しかし、この大企業が販売するコーヒー豆には、フェアトレードラベルがつけられます。フェアトレードラベル認証の最低保証価格は1kgあたり3.11ドル。価格の変動の大きい先物取引価格より、価格は安定しているものの、コーヒー取引の基準となるニューヨークの先物取引価格より、フェアトレードの商品の取引価格が低いのです。フェアトレードラベル機構が定めるフェアトレード最低保証価格は超えているものの、つまり簡単に言い換えると「フェアトレード」を名乗れる価格で買い取っているけど、先物市場とあまり変わらず、東ティモールの小農家の生活は全く向上しません。

この問題の背景には、FLOの基準があります。まず、ブラジルの大農場では、広大な平地で機械を使って生産しています。それに比べて東ティモールでは山の中で人の手を使って一つ一つ収穫され、人の手で選別されて、その後の加工も全て人の手で丁寧に行われて、生産されています。この生産力の差があるにもかかわらず、フェアトレードラベル認証の最低価格はブラジルのコーヒー価格を基準に決められています。

現在のフェアトレードラベルを貼り付けるときの認証手続きでは、大企業なら、簡単に認証させることができます。フェアトレードラベル認証のためには、ブラジルの大規模農場基準の最低価格と、商品の価格とは別に、足りない道具や設備を購入するためなどに使われるプレミアム（奨励金）を支払う必要があります。そのプレミアムの支払い方にも問題があります。コーヒーの木は、大きくなりすぎると収穫が難しくなるため、枝を切ることで将来的にコーヒーの木の生産力をあげるというカットバックと言うケアの仕方があるのですが、その知識や意義は教えずに、枝を切ったら1ドルというように使われていました。このような教え方ではいつまでたっても、フェアトレードの目的の一つでもある農家の自立ができません。

フェアトレードや希少なコーヒーと表示して販売しているにもかかわらず、現状、儲けているのは発展途上国の農家ではなく、先進国の大企業だけです。農家は、丁寧に指導すれば、高品質なコーヒー豆を生産できるのに、人手や金銭の不足などでコーヒーの収穫以降の加工ができず、為す術がなく加工前のチェリーの状態で安い価格で取引してしまっています。このような取引の仕方の商品がフェアトレードと呼ばれているのでしょうか。

フェアであること

また現在のフェアトレードは、高価格で外装が豪華なため、「高級品」のようなイメージをする人が多いでしょう。これは、フェアトレードを「ブランド化」して、商品の品質ではなく、フェアトレードだから高くても買うという考えにするための、企業のブランド戦略としても使われています。

大企業ならば簡単にフェアトレードラベル認証を取得でき、フェアトレードラベルの認証システムを商売に利用することもできます。東ティモールの農家は、本当の品質のいい、手のかかったコーヒー豆は今回お世話になったピースウィンズ・ジャパンのように品質管理が厳しく、でも買取価格の高い団体に売っているそうです。このようなコーヒー豆こそ、フェアトレード商品と呼ばれるべきではないでしょうか。

イメージだけを見て、生産者のことをよく知らないまま商品を購入しても、支援や、フェアトレードだとは言えないと僕は考えます。現在の消費者の意識では、少し高い商品を買って、貧しい生産者を助けた、支援した、という「自己満足」が得られるだけです。

生産者は、消費者が思っている以上に商品に自信と誇りを持って作っています。自信のあるいい商品を、適正な価格で販売し、消費者は品質に納得した上で適正な価格で購入する。これができなければ、それはいいことではなく、ただの自己満足です。

知産知消

事前学習で、阿部先生は「知る産知る消」という言葉でこのことを僕達に説明してくださりました。消費者は生産者を知って、商品を購入する。生産者は消費者のことを知って、想いながら生産することが大切だということです。

僕は今回の旅で、フェアトレードとは「消費者と生産者をつなげる運動」なのだと思います。実際に手伝ってみたら、農家さんの作業はとて大変でした。それでもすこしでも、品質を高めようと努力していました。農家のバボさんはコーヒー生豆の水分量について語ってくださり、そのこだわりの強さ、意識の高さに驚きました。そのような農家さんに、コーヒーに関する専門的な知識や、ここで作られたコーヒーが遠く離れた国々で高く評価されていることを伝えられるのは、実際にコーヒーを飲む私たち消費者しかいません。その土地に住み、作物を育てる「土の人」と、外から様々な知識や情報を伝える「風の人」。この二つの人の関係性がフェアトレードで一番重要だと思いました。

トレードとは、もともとお互いが良くなるものです。生産者は、美味しいコーヒーを売ることで、消費者の生活を豊かにする。消費者は生産者のことを知って、心を込めて作られた「美味しいコーヒー」を選んで買うことで、生産者の生活を豊かにする。これが本当の意味のトレードだと思います。

HR306 松本貫佑

